

芭蕉ゆかりの地連携

千住の団体呼びかけ

松尾芭蕉の魅力をアピールし観光振興を図ろうと、芭蕉ゆかりのある七つの町の市民団体などが連携し、「芭蕉翁 おくのほそ道ネットワーク」を発足させた。呼びかけたのは足立区千住で文化を柱にまちづくりに取り組む市民団体「千住文化普及会」。代表の機原文夫さん(54)は「ドイツのロマンチック街道のような、世界に誇れる歴史街道がつくれれば」と期待に胸をふくらませている。

「おくのほそ道」ネット

「たどる旅」など計画

同ネットワークは埼玉 県草加市、福島県須賀川市、山形県尾花沢市、三重県伊賀市などの愛好家グループが集まり、今月16日に結成した。結成の機会が開かれた千住地区は、芭蕉が奥の細道の最初の句を詠んだ地とされる。参加団体はいずれも、芭蕉ゆかりの自治体が持ち回りで毎年開いている理由を話す。

「芭蕉サミット」に出席してきた団体だ。先月、足立区で開かれたサミットで参加団体の調整役を務めた機原さんは「従来の芭蕉サミットは、各団体の事業報告などで終わってしまいがち。行政の境界にとらわれない活動を、市民の力で実現したかった」とネットワークを呼びかけた。

「楽しかった」この先の続きの旅もしてみたい」といった参加者の聲ぶりに、ツアーの担当者も「地元の人と一緒なのは地元の人が一番知っている」と話す。

同ネットワークは今後、参加団体を募りながら、芭蕉がたどった道を観光客が歩いて巡るルートづくりや、芭蕉に関する学べる市民講座「芭蕉大学」の設立などを検討

その一つが、足立サミットの翌日、栃木県内の業者が企画して行われたツアーだった。栃木県からの参加者25人を、機原さんが「芭蕉記念館」のある江東区から、芭蕉らが道中最初に一泊したとされる埼玉県春日部市まで案内した。隅田川を屋形船で上ったり、千住宿跡や草加市の松原を散策したり。千住文化普及会と「草加市奥の細道まちづくり市民推進委員会」が連携し、企画にかかわった。

また機原さんは足立区で、観光客に説明出来るガイドを養成するため講座を今年秋にも開くほか、芭蕉を研究する海外の学者などの窓口づくりも検討したいという。

力強い筆づかい 障害者の書作展

北区、きょうまで 140センチ×70センチの大きな画仙紙に「夢」や「愛」の字が力強く伸びやかに書かれている。北区王子1丁目の北とびあ6階キヤラリー遊で、知的、身体障害者の書作展が開催中だ。25日まで。



作品が32点並ぶ。指導する有馬高枝さん(62)は「写真」は「いい紙に、いい筆で、大きな字を思いきって書くよう指導してきた」と話す。おこうという雑念がないの

手本を見ながら「一字一画」を思いおもいの筆づかいで表現する。「あまよ。脱帽です」。入場無料。問い合わせはドリムワイ(03・3906・7753)へ。